

『関西企業ヒストリア』 ~その強さの秘密・転換点を探る~

創業から70年以上の歴史を重ねる会員企業を取りあげ、 時代の荒波を乗り越えて、長い期間にわたって生き残り成長してきた 強さの秘密、その歴史の転換点を探ります。

第36回 創業 1905年(明治38年) 奥野製薬工業 株式会社

奥野藤商店から奥野清商店へ ベーキングパウダーの国産化に成功

1922年 ▶ 奥野製薬工業の初代社長・寺内清六は、 1911年、14歳で故郷の広島から大阪・道修町へとやって来 ました。

天然藍の卸である家業の逼塞により、薬業による家業の 再興を考えた清六は、道修町の薬品屋 「奥野藤商店」 で奉公 を始めました。奥野藤商店は1905年に奥野藤吉によって創 業され、当時としては珍しいナフタリンや硼酸など、工業 薬品を扱っていました。

奉公に励む中、持ち前の誠実さと商才を藤吉に認められ た清六は、藤吉の娘・縁の婿として奥野家に迎え入れられ、 奥野藤商店を引き継ぐことになりました。

こうして1922年、清六は店を継承し、奥野清商店として 小分問屋の営業を開始しました。

清六は研究心や開発精神が非常に旺盛で、右の物を左に 売るだけでは満足しませんでした。少しでも工夫して、付 加価値のある物を売りたい、いつか自分の手に合う物を 作ってみたいと、常々考えていました。

その折、シーベルヘグナーという商社から「ベーキング



パウダー」の存在を 知らされたことに より、清六の運命は 大きく動き始めま した。

大正初期の店の様子

「どうやら欧米ではベーキングパウダーというふくらし 粉が一般的に使われており、日本ではまだ誰も作っていな いらしい という情報を得た清六は、さっそくドイツから 材料を取り寄せ、製造に取り掛かりました。

日本初のベーキングパウダー国産化は成功し、上海、マ ニラなどを始め、東南アジア各地にも多く輸出しました。



コマ印のベーキングパウダー 英語でコマを意味する TOP は頂点という意味もある ことから商標として採用された



赤血塩の製造開始 メーカーとしての第一歩

1926年 ▶ 清六が最初に手掛けた工業製品は、青焼 図面用の赤血塩の製造でした。当初の目論見としては、日産 50ポンド(約22.7kg)程度の生産を見込んでいましたが、 1926年当時の原始的な製造方法では、必要な結晶を採るの にとても苦労が要りました。

その後、大手製薬メーカーも赤血塩製造を開始しました が、当時の日本の市場では赤血塩をそれほど大量には必要 とせず、相場が下がって採算がとれないなどの理由からす ぐに赤血塩からは手を引きました。

こうして日本唯一の赤血塩メーカーとなりましたが、1939年に第二次世界大戦が開始すると、徐々に原料が入手困難になり、製造を中止せざるを得ない状況に陥りました。しかし、軍艦や飛行機などの設計図の青写真に赤血塩は欠くことができず、1940年には軍が原料を供給する形で日本海軍の指定工場となりました。

小分問屋からメーカーへと踏み出したことで、今の奥野 製薬工業を支える表面処理・無機材料・食品部門、この3つ の柱が形成されていきました。

無機材料部門への布石 ガラス用絵の具の製造を開始

1944年 ▶ 1944年には株式会社を設立し、奥野製薬工業株式会社と改組、資本金60万円でスタートしました。

1945年に終戦を迎えると、全国のあらゆる工場が壊滅状態にあり、限られた条件の中、製薬メーカーとして何をつくっていけばよいのかという問題に直面しました。

その折、奥野製薬工業に所縁のある人物からもらった「こんなにたくさんの材料(金属酸化物)が残っているのだから、瀬戸物用の絵の具でもつくってはどうだろうか」という助言をきっかけに、陶磁器用絵の具の製造・販売を始めました。これが現在、奥野製薬で装飾用ガラスエナメル(ガラスカラー)を取り扱うルーツとなりました。

現在の奥野製薬工業のガラス材料は、ガラスびんやコップのデザイン性向上に広く使用されています。また、自動車・鉄道などの窓ガラスにも機能性向上を目的として数多く採用されています。

さらに、近年はセラミック・金属粉末の焼結助剤や、電子部品の封着や封止材料として、コンデンサ、センサ、抵抗器などにも使用されており、スマートフォンやパソコンなどの電子機器に欠かせない存在になっています。

奥野製薬工業は、ガラスが持つ耐水性、絶縁性などの機能性に着目して、高耐食性コーティング剤や磁性粉末用コーティング剤などの最先端技術の開発に常に挑戦しています。



溶融ガラス冷却

主力である表面処理事業がスタート

1949年 ▶ 1949年にバフ研磨剤、1958年にニッケル めっき用光沢剤の製造販売を開始しました。これが、今の 表面処理部門へと繋がります。

現在、表面処理部門の製品は、スマートフォン、パソコン、自動車、家電製品、サーバーなどに広く使われています。なかでも、奥野製薬工業はアルミニウムの表面処理を得意としており、カラーアルマイト用の染料だけでなく、質感や手触りを向上させる製品も各種取り揃えて、前処理から後処理まで全プロセスの製品を世界で唯一提供しています。



総合技術研究所

OKUNOの強み 人材は宝、愛される製品づくり

2022年▶ 2022年7月より新しく品質保証センターとカフェテリア(社員食堂)がオープンしました。カフェテリアは従来よりも社員の利用が増え、お客様をお迎えして商談する場所としても使用し、好評を得ています。

また2025年度からの稼働を目指す、SDGsを意識した表面 処理部門の新工場を建築中で、年間売上目標400億円を支え る製品供給の体制つくりに取り組んでいます。

「ほんとうに愛される製品をつくり、みんなに愛される人になれ」という社是にもあるように、愛される製品をつくるためには、愛される人間を育てなければならない。この社是のもと、奥野製薬工業は、今後も常に業界をリードする新規技術の確立と地球環境へ配慮した製品の開発に重きをおき、お客様に愛される企業を目指し続けます。

奥野製薬工業 株式会社

本社所在地:大阪市中央区道修町 4-7-10 従業員数: 447名 資本金:7,000万円 事業内容:電子部品用各種処理薬品の製造と販売、

電子部品用低融点ガラスフリットおよびペーストの製造と販売、各種食品添加物製剤、食品用品質改良剤の製造と販売など